

Bibliophile Series

図書出版社

岩堀行宏◎著

英和・和英辞典の誕生

——日欧言語文化交流史——

圖書出版社

Bibliophile Series



英和·和英辭典

日欧言語文化交流史

岩堀行宏●著

工業學院圖書館
藏書章

岩堀行宏 (いわほり・ゆきひろ)

- 1932 年 静岡市生まれ
1956 年 明治学院大学経済学部卒業, (株)後樂園スタヂ
アム入社
1978 年 同社ロスアンゼルス駐在員事務所長
1981 年 帰国後同社取締役
1984 年 同社常務取締役
1987 年 (株)西日本後樂園 (別府市) 取締役社長
1995 年 同社取締役会長

英和・和英辞典の誕生―日欧言語文化交流史―

一九九五年四月三十日初版第一刷発行 ©

著者 いわほりゆきひろ
岩堀行宏

発行者 小川道明

発行所 株式会社 図書出版社

(営業部) 東京都新宿区白銀町一六番地 /
郵便番号一六二 / 電話〇三―三六〇―〇〇一一 /
FAX〇三―三六七―〇四五八
(編集部) 東京都新宿区簗笥町三九番地
大崎ビル五〇一号 / 郵便番号一六二 /
電話〇三―三六〇―一三五 /
FAX〇三―三六七―〇二八二
振替東京〇〇―二〇一八―二〇七二二

印刷 明和印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

装幀 熊谷博人

Printed in Japan
ISBN 4-8099-0517-9 C0090

落丁・乱丁本はお取り替えいたしません

刊行によせて

横浜市立大学教授 加藤祐三

ことは文化の核である。

「形を持つ文化」と「形を持たない文化」、そのうち後者の「形を持たない文化」の伝達は、その多くがことばを通じてなされる。「自文化」と「異文化」が接触するとき、ことばの理解が大きな鍵になる。だが翻訳は、正確な一対一の対応が難しい。普通は少しずれていたり、また一概念に対して三概念が対応することもあり、反対に一概念に対して〇・三概念ということもある。現代人は、外国語・外国文化を学習するさいに沢山の辞書や入門書、テープや映像などを活用できるうえに、ネイティブから直接に習う機会もある。それらを通じて翻訳の可能性と不可能性とを体得していく。

本書は、外国語習得の手段が乏しい草創期の物語である。ことばを通じた「自文化」と「異文化」の交流について、辞書を編纂した人々、彼らが残した辞典の成果と訳語とに照準を合わせている。十六世紀のポルトガル語との接触から十九世紀後半（明治初期）までの約三百年の、英和・和英辞典の

誕生にいたるまでの日欧文化交流史である。ことばと文化への限らない想いに溢れる本である。鎖国の最中にも、いな鎖国の最中だからこそというべきであろう、きわめて活発な辞書づくりがおこなわれた。それぞれの時代を生きた人々の、ことばと文化への情熱を今に伝えたいという著者の思いが全編に感じられる。

本書の著者は、青春時代から一貫して、ことばと文化に強い関心を抱いてきたようである。仕事の合間に古書店をまわり、辞典を収集し、先行の研究論文を読み、自身の見解を熟成させてきた。著者の英和・和英辞典のコレクションは一流で、ゆうに三〇〇冊を越える。昭和六十（一九八五）年九月二十二日の日本経済新聞の文化欄「英語辞典大好き 古書に感じる先人の熱意」という見出しの著者紹介の記事が、このことを良く伝えている。日本の経済人の文化水準の高さを証明する一例である。

この長年にわたる著者の蓄積を一書にしたのが本書である。ふんだんに挿入されるエピソード——辞書作りの苦勞、食べ物、男女関係、政治と宗教など——からは交流史を生きた人々の息づかいが聞こえる。辞書のなかの訳語の変遷や、実用会話書に見られる記憶法（日本語の単語に語呂を合わせたものなど）などは、時代を越えて生きる文化の一面を示し、同時に新しく誕生してくる文化の諸相を活写する。

現代日本語では、ことばの表記に四種類の文字を使う。地の文には五十音のかな（平仮名）、主要概念を盛るのに漢字（常用漢字数は一九四五字）、外来語や外国の地名・人名にはカナ（片仮名）、さ

らに最近では社名などにローマ字を多く使う。こうなったのは、ごく最近のことだが、ともあれ、表意文字の漢字と、三種類の表音文字の、合計四種類 of 文字を使い分ける文化は世界に類を見ない。

古代に漢字を導入することにより無文字段階を脱して以来、幾多の文化接触・交流の段階を経て、四種類の文字使用にいたった。表意文字の漢字から意味を排し、表音化して使う方法は、すでに古事記、日本書紀などにも見られるが、それを体系化したのが平安時代に開発された、カナと平仮名である。仮名という表音文字に慣れた伝統の上に、表音文字ローマ字の理解が素直に行われたものと考えられる。

日本語を母語にするわれわれには、これは取り立てて言うほどのことではない。日常の意識にのぼることさえない。ところが日本語を外国語とする人々の側から見ると、この日本語の四種類の文字は、ある種の「非関税障壁」とも言える。表音文字の文字数はわずか五十程度だが、彼らが日本語や中国語を学ぼうとすると、一〇〇〇とか二〇〇〇という気の遠くなるような数の漢字を習得しなければならぬ。あたかも万里の長城を徒歩で越えるようなものである。一方、表意文字の漢字だけを使用する中国語では、外国の地名・人名など音のみを表記するための「単純化した記号」（＝表音文字）がないため、国際化のすすむなかで、いつそう困難に直面している。

日本語がローマ字に最初に接触したのが十六世紀、ポルトガル語である。やがてキリシタン禁制・ポルトガル人追放・鎖国の完成により、ポルトガル語は後退し、代わりにオランダ語が主流となる。十九世紀に入るといっせいに英語学習時代が始まり、さらにフランス語、ドイツ語などがつづいた。

それぞれの時代の大国のことはを忠実に追ってきた。この変遷が本書の対象である。

本書を貫く著者の大きな柱は次の三つであろう。

第一に、十六世紀から十九世紀にいたるまで、日本語が西欧語に接したとき、それぞれ媒介言語があったという点である。二重通訳に当たる。ポルトガル語に初めて接したさいの媒介言語は漢文であった。W・アダムスの英語に接したときの媒介言語はポルトガル語であった。やがて長崎にオランダ人が滞在するようになると、直接の接触によりオランダ語の学習が始まった。その次にくる英語学習のさいの媒介言語には、それまでの蓄積を受けて漢文とオランダ語の二系統があった。三百年にわたる日本人の外国語習得の歴史を、この一本の筋を通して見る立場は一貫している。

第二に、ことばが文化の核という側面にとどまらず、文化の本質を知るための手段（技術）という側面に巧みな配慮がなされている点である。ことばには「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技法があるが、多くの辞書は「読む」「書く」の道具であるのたいして、会話書は「話す」「聞く」に重点を置いた辞典である。本書で取りあげている福沢諭吉の『華英通語』は、アメリカで購入した華英会話書の華（中国語）の部分を和（日本語）に置きかえて作成したものである。ここでも媒介言語が生かされている。

「読む」「書く」は沈黙の文字だけで示すことができるが、会話書には音の表示が不可欠である。『華英通語』のなかで「イズ・ブレッキフハースト・レヂ」と表記し、「アサメシハデケタカ」と福沢の出

身地大分の中津弁で和訳していることに目を止める。ほほえましく、福沢の肉声が聞こえてくるようである。日本語は、明治中頃まで「書く」と「話す」とが別々で、標準語もなく、多様な方言があった。日本語と外国語の辞書を使って、日本語自体の変遷の跡が見えてくる。

第三に、本書は日本人の外国語・異文化学習の歴史を描くと同時に、外国人による日本語・日本文化の学習過程をもう一本の太い柱として描いている。日本文化を高く評価し、和英辞典の作成に尽力した人々の姿と、その成果の歴史である。オランダ人のドーフ、アメリカ人のウィリアムズ、ブラウン、ヘボン、イギリス人のメドハースト、ドイツ人のギュツラフなどの事績、それらを注意深くたどろうとする著者の態度には、「自文化」と「異文化」の差を越えた「人類の文化」への想いがあり、読者の胸を打つ。

さて、最近の日本の大学はいろいろな面で変わりつつある。その一つの特徴が、歴史や文学あるいは経済など個別分野の学習と同時に、それらに貫通する広義の文化の把握を強化しようとする傾向である。すなわち「自文化」と「異文化」をともに理解する、基礎的な教養を身につけた人材（国際人）を育成したいとするものである。こうした傾向が遅ればせながらも生まれてきたのは、たいへん喜ばしい。

しかし、そのための良いテキストは残念ながら、ほとんどない。青春時代における学問への関心は、日常的な関心から始まり高度のものへ到達するという段階を踏むが、その最初のきっかけになる良い

テキストがきわめて少ない。その点で本書は、高校・予備校・大学などの恰好の教材になると思う。語学の授業で、歴史の授業で、使い方はさまざまにあらう。私は大学で東洋史や近代世界史を教え、大学院国際文化研究科では文化交流論を担当しているが、参考書として学生諸君にぜひ読ませたいと思っている。

著者のように、社会に出てからも、たゆまず自ら優れた教養を育てる人は、日本文化を本物にする貴重な存在である。そういう意味からも、本書が広く読まれることを心から期待したい。

一九九五年三月

大島堅造著

山の古典と共に

山と山の本をこよなく愛したバンカー、大島堅造が、自らの山行の思い出とジムラーの『アルプス回想録』などの古今東西の山の本について自在に語る。

三六〇五円

富田修二著

グーテンベルク聖書の行方

グーテンベルク聖書は印刷術や聖書の研究に欠かすことができない。四十八部しか現存しないこの聖書の行方を追尋しつつ、そのさまざまな意味を明らかにした書下し。

七二一〇円

D・ハンター著 樋口邦夫訳

紙と共に生きて

世界各地で伝統的な製紙技術を学び、各種の紙や道具も蒐集、その記録を出版するなど本つくりのあらゆる分野に通曉した、紙研究の第一人者ともいえるハンターの自伝。

三四四〇円

P・シヤンピオン著 有田英也訳

わが懐かしき街

セーヌ河岸、美術学校そばの路地。シヤンピオンはその一隅に暮らしたベル・エポックの出版人である。古文書を尋ね、古本屋をめぐり、有名無名のパリジャンたちを語る回想録。

五一五〇円

長谷部史親著

推理小説に見る古書趣味

古書の世界に該博な知識をもつ著書が、チェスタトン『古書の呪い』、ページ『古書殺人事件』といった古今東西の推理小説を材に採り、推理小説と古書趣味との関わりを紹介する。

三〇九〇円

A・ラング著 不破有理訳

書物と愛書家

19世紀に民俗学者、随筆家と多彩な活躍をした愛書家A・ラングが語る、自らも含め造本の違いに目の色を変える蒐集家や猟書家の末路など『本』とその虜となった人々の逸話の数々。

三〇九〇円

谷田博幸著

ヴィクトリア朝挿絵画家列伝

クルックシャンク、ジョン・リーチといったヴィクトリア朝期に活躍した挿絵画家の中より特に興味深い人物をとりあげ、彼らにまつわる数々のエピソードを披露する。図版多数。

五一五〇円

J・ウェルズ著 高島みき訳
ロンドン図書館物語

気谷誠著

愛書家のベル・エポック

J・H・バートン著 村上清訳
書物の狩人

清水一嘉著

イギリスの貸本文化

S・ソコリスキイ著 源貴志訳
書物の話

J・カーター著 横山千晶訳
西洋書誌学入門

高宮利行著
愛書家の年輪

トマス・カーライルが作り上げ、イギリス最良の図書館とも言われているロンドン図書館について、作家や俳優として多才に活躍するジョン・ウェルズが自在に語る。 四八〇〇円

愛書家アンリ・ペラルディの活動を中心に20世紀初頭のパリに花開いたベル・エポック期の書物を彩った数々の挿絵や装幀を紹介し、古き良き時代の精髓を伝える。図版多数。 四二二〇円

第31回日本翻訳文化賞受賞。英国の稀代の愛書家たちの面影を紹介し、愛書家とはいかなるものかを描きだすと共に、19世紀の英国のブッククラブとその書物についても詳細に語る。 七二二〇円

「悪魔の知識の常緑樹」とけなされる一方で「愛書家の心の故郷」と讃えられた、英国の貸本屋たちの栄枯盛衰の跡を、その誕生より20世紀半ばの消滅まで詳しくたどった異色の文化史。 四四二九円

ロシアの書物の歴史の隠された数々のエピソードを、ロシアきつての愛書家・蔵書家であるスミルノフ・ソコリスキイが縦横に語る本書は、ロシアの愛書家必読の書として名高い。 四四二九円

20世紀イギリスを代表する愛書家である著者が、書物の世界に関心を抱くすべての人のために、書物蒐集に際して使われる言葉や語句を定義した入門書兼用語集。 五六五円

19世紀より今日に至る、コンスタブル、ディアデューン等の英国の愛書家や書誌学研究の課題、ウィクトリア朝書物文化の中世趣味の行方等を論じ、書物の世界を探索する羅針盤を提供する。 二九八七円

R・テプフェル著 加太宏邦訳
アルプス徒歩旅行―テプフェル先生と愉快な仲間たち―

寄宿舎の学生一九人を連れて、雄大なアルプスを縦横に徒歩旅行するユーモラスでやさしいテプフェル先生のスィス、アルプスの旅行記。ヨーロッパの旅行ブームの先駆けとなったスィス紀行の古典的名著 三二九六円

G・ハワード著 柴田都志子訳
サハラ砂漠縦断記

砂漠をラクダなしに横断することは奇跡に近い。しかし、著者は中国古代の知恵である手押し車を積むことで、徒歩によるサハラ砂漠の縦断という快挙をなし遂げた。本書はその感動的な記録である 三四四〇円

M・ハドスン著 由布翔子訳
われらが祖母の太鼓―私が愛したアフリカ娘―

西アフリカ、ガンビアの農村に一四ヵ月間暮らしたイギリス青年が、村の娘と恋に陥ち、次第にアフリカの農村の生活や慣習になじんでいく様子を赤裸々に語る。トマス・クック紀行文学賞、S・モーム賞受賞 四八〇〇円

P・キャンビー著 大窪一志訳
マヤ 神秘を開く旅

一九八〇年代初めのグアテマラで内戦が激化する中、ペテンのゲリラ地帯、人跡未踏のラカンドン熱帯雨林、ベリーズの巨大洞穴内の地下祭儀場など各地で危険にみちた旅に挑む、異色の中米紀行 四二二〇円

H・ウッド著 安引宏訳
インド・大いなる母―三等列車の旅ハ〇〇〇キロ―

ベンガルの農村に暮らす四五人の老人たちが慈悲深い地主の好意により、三等車に乗ってインド各地を七ヵ月間にわたりハ〇〇〇キロの旅に出る。ユーモア溢れる筆致で綴るインド人によるインド紀行 五一五〇円

R・スワン著 三方洋子訳
北極を歩く

南北両極点徒歩到達という史上初の試みに挑戦する著者は南極に続き国籍の異なる八人の仲間と共に、あらゆる困難を克服し、日本やソ連のグループと競いながら北極点をめざす、その勇気と忍耐の記録 二九八七円

P・デイヴィス著 大窪一志訳
ハート・オブ・アメリカ―中西部トラック紀行―

一九九一年の春、著者は中古のフォード・トラックに乗ってカンサス州をめざして出発する。途中出会うカウボーイやインディアン達と親しく交わり、彼らの中に真のアメリカ人の姿を見出すロード・ストーリー 四二二〇円

J・ローマックス著 仙名紀訳
ヴァイキングの航海―「ガイア号」で
アメリカ大陸へ―

P・L・ファーマー著 田中昌太郎訳
贈物の時 ヨーロッパ徒歩旅行Ⅰ

サマウイル&ロス著 柴田都志子訳
ワイン村の秋

J・モリス著 青木公訳
カナダ旅行

L・トーマス著 由木礼訳
イギリスの田舎へ行こう

H・ジェイムズ著 千葉雄一郎訳
郷愁のイタリア

C・サブロン著 高山芳樹訳
ロシア民族紀行

コロンブス以前、すでに一〇世紀ころにヴァイキングが
アメリカ大陸へ到達していたことを実証するため、ヴァ
イキング船を復元した「ガイア号」でノルウェーから北
米をめざし、北大西洋を横断する大冒険 三五〇二元

一九三三年二月、一八歳の少年がアムステルダムから
コンスタンチンノープルへ徒歩による放浪の旅に出た。
少女との淡い恋も描きつつ、少年はウィーンからハンガ
リーをめざす。W・H・スミス文学賞受賞 三〇九〇円

ロートシルト、サンテミリオンなどフランスを代表する
ワインの産地メドック地方を訪れた二人の陽気なスコッ
トランド女性が豊醇な香りの漂うワイン村の収穫の喜び
を村人たちとともに満喫する 二〇六〇円

オタワ、モントリオール、トロント、ヴァンクーヴァー、
バンフなどカナダの一〇の街の歴史、風俗、文化、社会
を独自の視点で捉え、多文化・多民族国家へと変わりゆ
くそれぞれの街の表情をスケッチする 二三六九円

蒸気船の浮ぶオックスフォード運河、鷺が空を舞う海辺、
吊橋のかかる静かな溪谷、羊が草を食む峡谷、冬のコー
ンウォール岬など観光客が訪れることのまれな英国の田
舎の魅力を人気作家が自在に綴る名篇 二九八七円

イタリアを心の底から愛した米国の作家ジェイムズが、
ローマ、ヴェニス、ミラノ、フィレンツェなどを巡ね、
それぞれの土地の歴史や文化、社会や経済などについて
独特のタッチで綴る自らのイタリア紀行 二五七五円

ソヴィエト・ロシア末期のバルト三国、ベラルーシ、ウ
クライナ、チェチェン、アルメニアなどに生きる民衆と
の親交を通して今日のロシアやスラブ諸国の混乱と流血
の原因をさぐる、予見的見聞録 二九八七円

シリーズ・サイコ

全 10 卷

* 既刊

人間はどうしたら真の心身の安息を得られるのだろうか。予知・遠視・透視・念力・テレパシーといった能力を人間は持っているのか。宗教的奇跡は？ シリーズ・サイコは近代の合理化主義が闇の世界に葬り去ってきたこうした問題に新たに光をあてて、ポストモダンの知の荒野を鋤き返す試みです。

L・ルシャン／大窪一志訳

1 瞑想入門*

——自己発見へのいざない——心の悩みを解決し心身の真の安息を得て、充実した人生の道を切り拓く瞑想の方法を簡潔にわかりやすく説く、米国でもミリオンセラーとなった、瞑想入門の決定版！

一八五四円

M・シュナイダー／柴田都志子訳

2 自己治療への道

再三の手術にもかかわらず七歳で失明を宣言され、その後自らの編み出した訓練によって眼鏡なしで本が読めるまでに回復した著者が、ホーリズムに基づく自己治療の方法を詳しく平明に解説する。

近刊

A・ミンデル／松永太郎訳

3 シャーマンズ・ボデイ

心理療法の実践などに取り組む著者がアフリカ原住民、インディアン、アボリジニーなどの土俗的呪術者や世界各地の導師たちとの出会いと通じて臨死体験やシャーマンの儀式で体験する「夢見る身体」に迫る。

近刊

4 クリシュナムルティ／松永太郎訳
不可能な問い

自由、恐れ、喜び、宗教、虚無、意識と無意識、死と生などについての対話を通して、人間の内面を完全に変革するとはどういうことであるかを明らかにしつつ、その実践方法を示す。

近刊

5 D・E・ハーディング／由布翔子訳
心眼を得る*

著者自身が体験した「頭がなくなる」状態―自分の名前も理性もすべてが消え去って、空気よりも軽くガラスよりも透明な自己の一切が解放された状態―に入る方法やこの体験と神との関わりなどを論じる。

二〇六〇円

6 A・バンクロフト
精神世界の旅

人間の過去と現在の両者を体現する霊性の目覚めや地霊、呪術、宗教、といったものの多様な伝統が、いかに人間の生活や態度に深い影響を与えてきたかなどを英国の女流比較宗教学者が明らかにする。

近刊

7 レネエ・ウエーバー／大室一志訳
知識と知恵のあいだ

S・ホーキング・グライ・ラマ、I・プリゴジン、クリシュナムルティらとの対話を通じてウエーバーは科学と神秘主義が対立するものではなく、原理を共有するものであることを明らかにしていく。

近刊

8 S・ブラックモア／由布翔子訳
自然科学と臨死体験

臨死体験とは死後の世界の存在を証明するものなのか、瀕死の脳の生理学的変化の産物に過ぎないのか。著者は多くの臨死体験者に面接し、歴史的事例をも調査し、臨死体験者と科学の間の接点を探る。

近刊

9 K・C・マルキデス／大和弘毅訳
キプロスの霊能者

キプロス島で話題の霊能者グスカロスの霊的能力の諸相を米国の社会学者である著者が科学的に探求しつつ紹介する。コリン・ウイソンも「霊的能力についての折り紙つき本」と絶賛した名譽の翻訳。

近刊

10 K・C・マルキデス／大和弘毅訳
太陽への賛歌

「キプロス霊能者」に続くグスカロスの驚異の霊的能力についての報告。病気の奇跡的な治癒、テレパシー、幽体離脱などグルジェフやカスタネダをしのぐ神秘の力が次々と明らかにされていく。

近刊

＜図書出版社の単行本＞

L・ルシヤン／大窪一志訳
やせる瞑想——1日30分でやせる——

ダイエットにつきもののリバウンドや副作用もなく、一日30分のプログラムにしたがつて瞑想法にもとづくマインドコントロールをくりかえすだけで安全にやせて誰でも健康な身体になれる、画期的な本。 一七〇〇円

C・ジェンクス／大和弘毅訳
ホームレス

八〇年代以降アメリカで深刻な社会問題となっているホームレスの増加。麻薬、アルコール、ドヤ街の消滅等ホームレスの実態、発生の原因、救済策を論じたホームレス研究の必読書。岩田正美都立大教授監訳・解説。二五七五円

松下恭子著
赤ちゃん物語

初めて妊娠から出産、そして子育てと愛娘にそそぐ愛情を母親が優しく語る。母乳のやり方、離乳の時期、病气への対応、話しかけ方、絵本などの与え方など日々の体験にもとづいた子育てのヒントの満載。 一八五四円

高宮利行著
愛書家のケンブリッジ

旧知の書誌学者や古書店主、図書館員たちとの書物談義、中世のインクynaブラや写本との出会い、小旅行やオペラ鑑賞……。英国の大学町ケンブリッジの優雅なカレッジ・ライフを日本を代表する愛書家が語る。二三六九円

ヤヌシュ・コルチャック／近藤康子訳
もう一度子どもになれたら

生涯を子どものために生きたポーランド人コルチャック先生が、子供の心の奥深くわけ入り、彼らの喜びや悲しみ、怒りや笑いを見事に描いた、誰もが共感してやまない万人のためのメルヘン。萱 慶子装画。一五四五円

白居利朋著
死と信仰の心理

やがてくる死と死後の世界を怖がることなく前向きに明るく迎えるために、宗教・哲学・医学・心理学・臨死体験・尊厳死など今日的な視点から生と死の問題の総合的な解明を試みた、現代人の待望の一冊。 二三六九円

RS・L・ナーラーヤン／芳賀明夫訳
インドのふしぎ

シヴァってなに？ このカレーの作り方は？ サリイはどう着るの？ といった外国人旅行者の素朴な疑問にマドラスの美人ガイド二人が答える、これでインドがわかるユニークなガイド。瀬戸内寂聴氏推薦。 一五四五円

英和・和英辞典の誕生
§ 目 次 §